

● 古文書學概論

勝峯 月溪著

近來國史學の發達普及著しく、従つて古文書の利用は益々多からんとしてゐるが、古文書學に關する著書は古く久米博士の古文書學講義がある位のもので、それにて今日容易に手に入れ難く、久しく此種の著書が世に出てなかつた。然るに此度勝峯文學士によつて本書が編著されるに至つたことは學界のため喜ぶべき事と云はねばならぬ。著者は年來京都大谷大學に於て古文書學を講じ斯學に關し研鑽を積まれつゝあつたが、其間之に關する著書を編成せんとし、京都帝國大學古文書室及び大谷大學圖書館に於て更に博く資料を蒐集調査すること約二ケ年殆んぎ全力を之に傾倒されて居つたが、其の原稿が將に完結に近づくかんとして居つた時に圖らずも急逝されたのは實に惜みても餘りあることであつた。著者の同窓徳重淺吉學士は友愛の情極めて深く、如何にもして故人の素意を達せしめんとし、多忙なる學事の餘暇、或は原稿を補訂し或は圖版を選定して文字に一々訓點を施す等、並

紹介

々ならぬ助力を加へられて茲に漸く刊行が成つたのである。全編は序論第一章古文書學の概念、第二章古文書學の發達、第三章古文書學研究上の諸注意、本論前篇外的研究、第一章古文書の材料及び製作の器具、第二章古文書の形狀、第三章書體、第四章書風、第五章花押、第六章印章、後篇内的研究、第一章言語及び文體、第二章樣式總説、第三章樣式各説、第四章眞偽批判、第五章解釋及び效力の考究、とし終りに索引を附してある。古文書學に關するあらゆる資料の集成に努め、殊に各種の古文書を一の體系の下に分類配列を試みたことは著者の最も苦心の存する所であつたと思はれる。斯學の研究をなさんとする人々には恰好の書物である。(菊判七八七頁、東京目黒書店發行、價拾貳圓)〔松野〕

● 日本巫女史

中山 太郎著

日本に於ける巫女の發達を記述せるものとして空前の大著である。總論に於て巫女史の本質と學問上の位置を論じ、第一篇を固有咒法時代として應神天皇以前を取扱

第十五卷 第三號 四五二